

病気と死に向き合う医師ビアンション

— 『人間喜劇』における医学の視点（2）—

松 村 博 史

はじめに — 本稿の目的と方法

小説家バルザックは、その作品の中でさまざまな種類の人間を描いているが、それと同時に人間をどのように観察するかということについても深く考えを巡らせていた。バルザックの創作方法は人物再登場法とあって、同じ登場人物がいくつもの作品にわたって現れることで知られているが、彼の創りだした登場人物の中でも、とりわけ医師のビアンションは、人間を心身の両面から観察するというバルザックの人間観察の方法を体現する存在であると思われる。彼は医者として多くの人物の病気を診察し、その死にも立ち合っているが、ここではそのような場面の主なものを取り上げて分析を加えてみたい。病気とはそれぞれの人間が抱える問題の具体的な表れであり、死はそれまでの人生が凝縮された瞬間であろう。そうした場面にしばしばビアンションが配されていることから、作者がこの人物の観察能力をいかに信頼していたかがわかる。

この論考は、本紀要の前号に「医師ビアンションの目」¹⁾というタイトルで発表したものの続編である。前の論文ではバルザックの作品にたびたび登場するこの医者的人物像がいかに形作られてきたかを検討した。ビアンションはバルザックの作品中では医者のプロトタイプとすべき存在で、同時にあらゆる再登場人物の中でも最も登場回数、登場作品数が多い。しかも面白いことに彼はどの作品においても決して主人公すなわち事件の当事者にはならず、つねに脇役として現れてくる。これはバルザックの作品の中で「医学」というものが占めている位置と関係があるのだろう。すなわち事件を客観的に見つめ、人間を心と体の両面から観察するという医学の視点をビアンションが代表していると考えられるのである。

こうした視点は、初期のバルザックの作品では何人かの異なる登場人物の間に散在していたが、『ゴリオ爺さん』が出版された1835年以降、年代を追うに従って次第にビアンションという一人の人物に集約されてきた。こうしてビアンションは、『人間喜劇』中の主要な再登場人物 (personnage reparaissant) であると同時に、再登場する視点 (point de vue reparaissant) と

なっていったというのが前の論文の主旨であった。

今回はピアンションの役割の中でも、とくに彼がさまざまな人間の病気や死に直面する場面を中心に扱うが、恐らくバルザックの読者には、ピアンションの第一印象はむしろこうした側面の方が強いのではないだろうか。私自身もそうだった記憶がある。ピアンションは何よりも、人が死にそうになる場面に必ず登場してくる医者という印象があるのだ。『ゴリオ爺さん』の最後で友人のラスティニャックとともにゴリオ爺さんの苦しみと死を見守ったり、あるいは『村の司祭』で主人公のヴェロニク・グラランの死の直前に彼女を診察するピアンションは、バルザックの読者なら誰でも知っている。改めて読み返してみると、彼の登場はほんの一瞬であることも多いのだが、それでもそうした場面は鮮やかな印象を残すのである。

この論文でも、分析の中心がピアンションの「視点」であることに変わりはない。しかし前回と異なる点は、前回は『ゴリオ爺さん』を別にすれば中短篇が中心だったが、今回は『村の司祭』『ラブイユーズ』『従妹ベット』など長編小説を扱うことが多くなるということである。長編小説、とくにバルザックのような作家の小説の場合には、解釈は一つの切り口ですむものではなく、さまざまな要素、さまざまなテーマが複雑に絡み合っ、一つの総合体を作っているのが普通である。従ってここではそれらの小説全体について新しい解釈を提示するのではなく、その中からピアンションが登場するいくつかの場面を取り上げて共通する要素を取り出し、それらの場面をつなぐ何本かの糸を見出していく試みができればと考えている。

1. ピアンションの役割の変遷

ピアンションが医者としてさまざまな人間の病気や死に立ち会う場面だが、その主要なものは1839年以降に集中的に現れ始めると考えられる。プレイヤード版『人間喜劇』第12巻の最後にバルザックの登場人物のインデックスがあり、そこには各登場人物が現れる作品とそこでの活躍が網羅されているが、それによればピアンションは1797年頃に生まれたのであろうと推測されている。²⁾ すなわち作者バルザックより二歳年上の設定である。ピアンションが初めて登場する作品は1835年に出版された『ゴリオ爺さん』で、ここでの彼はラスティニャックの友人の医学生として描かれている。それ以前に出版されたバルザックの作品『二重家庭』『女性研究』『あら皮』などにもピアンションが登場することになっているが、これらは前の論文で見たように、当初は別の登場人物であったものが後にピアンションに差し替えられたものだ。

この『ゴリオ爺さん』と、翌1836年に発表された『無神論者のミサ』『禁治産』の三作品で、

ピアンションの人物像がほぼ完成するが、これらの作品とその後のいくつかの作品では、学生時代、あるいはそれに続くオテル＝ディユー（パリの施療院）におけるインターン時代など、比較的若い頃のピアンションが描かれている作品が目立つ。この時期の代表作『幻滅』におけるピアンションの役割は小さくないが、ここでの彼はやはり職業としての医者のプロトタイプと言うよりは、ダルテーズの文学的セナークルの一員として、リュシアンの小説の批評をしたりしている若者という側面が前面に出ている。また『カディニャン大公夫人の秘密』におけるピアンションもどちらかというところダルテーズの友人という文脈で描かれている。このあたりまでのピアンションは、基本的には『ゴリオ爺さん』に登場する医学生生の延長と考えることができるだろう。例外もあるが、このあたりまでをピアンションの青年期として括ってみたい。

このようにピアンションの役割を見てくると、1839年の『村の司祭』における彼の活躍が一つの転換点になるように思われる。この作品でピアンションは主人公のグララン夫人が亡くなる直前に診察を行うが、ここでのピアンションの役割は、後の作品での彼の行動のモデルとでも言えるような位置を占めている。この物語の最後の場面は1844年という設定で、ピアンションは一気に47歳と言うことになってしまうのであるが、ともあれ、ここからのピアンションは医者としての地位を確立し、一人の個性を持った登場人物であると同時に、『人間喜劇』中の医者のプロトタイプとしての意味合いを帯びてくるようである。バルザックの作品中での彼の成長過程からすると、壮年期に入ったと言えることができるだろう。

事実、今回のテーマである病気と死に直面するピアンションの役割は、ここからが特に目立つようになる。まず『村の司祭』の直後に、1840年の『ピエレット』がある。ここでは年上の従兄たちに冷たく扱われて重い病気になった薄幸の少女ピエレットを診察し、こうした虐待行為に憤りを覚えている。また1842年の『二人の若妻の手記』では、主人公である二人の若い妻の一人、マリー・ガストン夫人の病床に呼ばれて、彼女の死を予言している。同じ年に出版された『ラブイユーズ』では、放蕩息子のフィリップ・ブリドーと結婚したラブイユーズことフロール・ブラジエの最後の病床に立ち合っている。

このように見てきても、人の死の直前につねに証人として立ち合っている医者という、読者がピアンションに対して抱いているイメージが、主に1839年以降の作品で確立されたものだということが理解できるだろう。他にも挙げていけばいくつもあるのだが、こうしたピアンションの役割の延長上の最後に、晩年の作品である『従妹ベット』におけるピアンションがいるように思う。

ここで彼はユロ男爵夫人の診察に来ているが、それと同時に従妹ベットの愛称があるリスベットの気管支炎に気付いている。これは彼女を死に至らしめる病気であった。そして男爵夫人を苦

しめていた二人、クルヴェルとその妻になったヴァレリー・マルネフが奇病になり、全身が腐って死んでいくのにも立ち合っている。『従妹ベット』でのビアンシヨンの役割は、まさにこれまでの彼の経歴の総括とも言えるものだが、この場面の物語における設定が1843年、ビアンシオンは46歳で、これを書いている時点でのバルザック自身とほぼ同じ歳であることも象徴的だ。

2. 病気や死に直面するビアンシオン——いくつかの作品から

それではこれから、ビアンシオンが人間の病気や死に直面する場面の中でも主要なものをいくつか取り上げて、彼がそれらを見つめる視点の特徴をいくつか明らかにしてみたい。ここで扱おうとする作品は『ゴリオ爺さん』『村の司祭』『ラブイユーズ』『従妹ベット』の四作品である。とくにこれらの作品では、ビアンシオンが小説の主要人物の死の間際に立ち合っている場面が見られる。これらの場面を一つずつ検討して、そこに含まれる要素をいくつか取り出しながら、作品と作品をつなぐ糸がそこに見出されるかどうかをこれから確かめていくことにする。またそうした要素を明らかにしながら、必要ならば他の諸作品にも適宜触れることにしよう。

a) 『ゴリオ爺さん』

最初は『ゴリオ爺さん』である。ビアンシオンが病気や死に関わる主要な場面が1839年以降に出てくると今し方述べたことと、1835年に出版された『ゴリオ爺さん』の中でビアンシオンがゴリオ老人の病気を看病し、ラストイニャックとともに最期を看取っていることは矛盾すると思われるかも知れない。しかし他の全てのバルザック的な要素と同じく、ビアンシオンについても主要な側面はここで一通り出尽くしている感がある。前回の論文においても、『ゴリオ爺さん』についてビアンシオンの観察家としての側面、冗談好きの側面、そしてつねに事件の全容を見渡せる立場にいる点などを指摘したが、病気と死を見つめるビアンシオンについても、ここにその原型が認められる。

それではビアンシオンがゴリオ爺さんの病気を見つめる目というのはどういう性質のものなのか。ここでの彼はまだ医学部の学生に過ぎず、ラストイニャックやゴリオ老人などの暮らす下宿屋ヴォケー館に食事だけのために来ている身分なのであるが、すでにゴリオの病状に関する確な診断を下している。最初にその場面から引用してみよう。彼はテーブルに座ってパンの匂いを嗅いでいる老人を見ただけで、次のような判断を下している。

「もし間違いでなければ、奴さんもうおしまいだ。体内で何か異常が起きたのに違いない。漿液性卒中の危険があるようだ。顔の下半分は落ち着いているが、上の方の各部は意志に関係なく額に向かって引きつっている。見ろよ！ それにこういう目の状態は、漿液が脳に入り込んだことを示しているんだ」(Ⅲ, p. 254)³⁾

以前にも示したことがある⁴⁾が、ここでのピアンションは、当時の医学の最新の成果を取り入れた病理解剖学的な視線を体現している。すなわち身体の表面に見える徴候から身体内部の様子を推察する方法である。ピアンションはテーブルに座ったままのゴリオを観察して、老人の体内で起こっている現象を手取るように見ているのだ。しかしここではあまり専門的なことに立ち入らずに、そのよう視点の持つ「意味」の方を探ってみたい。

この小説において、ゴリオ爺さんの謎は十九世紀のパリという大都会の謎をも象徴している。法学部の青年ラスティニャックが、貴族のもとに嫁いだ二人の娘に最後の財産まで奪われてしまうゴリオ老人の犠牲の背景を知ることによって、地方出身の若者から脱皮してパリに生きる人間になっていったというのが、この小説の主要な文脈となっている。ピアンションは、ラスティニャックとは違う角度からゴリオ爺さんを眺めているが、彼は彼独特の冷静な観察力でゴリオの内面を見透し、さらにはこの老人の苦しみを通してフランス社会の仕組みをはっきりと見据えている。⁵⁾ここでのゴリオの病とは、王政復古時代のフランスの病理をそのまま反映するものであり、それを見つめるピアンションの目は、十九世紀のフランス社会に対する「病理解剖的」な視線を表すものに他ならない。

ピアンションは上のような診断を下したあとで、すぐさま精神面の影響にも目を向けて、ラスティニャックに次のような質問を投げている。「どんな出来事がこの病気を引き起こしたのか、君は知らないか？ ゴリオ爺さんは何か激しいショックを受けたのに違いない。それで精神がまわってしまったのだらう」(*ibid.*)。このピアンションの観察もまた正確無比なものである。この少し前に、お金の問題で追いつめられた二人の娘がゴリオ爺さんの前で醜い口論をし、そのショックが彼には致命的な打撃となったのであった。ピアンションはこうしたゴリオ爺さんの苦悩の性格をはっきりと見抜いている。

ピアンションの視点のもう一つの際立った特徴は、身体 *physique* と精神 *moral* の両面から人間を捉えているということである。それが当時の一部の医学書⁶⁾にあるように、表面的に心身の相関関係をたどるだけでなく、直感的に人間の全体像を捉える能力にもなっているのである。このようなピアンションの視点の有りようは、次のような引用にもよく表れている。

「ビアンション、おまえ」とラスティニャックが言った。「よせやい、この病人は一つの科学的事実なんだ」と医学生が新米らしい情熱をあらわにして答えた。「何だよ、じゃあこのかわいそうな老人に同情して面倒を見ているのは僕一人というわけか」とウジェーヌがこぼすと、ビアンションはその言葉に大して腹を立てた様子もなく言葉を継いだ。「もし君が今朝の僕を見ていたら、そんなことは言わないだろうな。経験を積んだ医者たちは病気が見よとしない。僕はまだ病人を見てしまうと言うわけさ。どうだわかったかい」(Ⅲ, pp. 270-271)

このような一節はうっかりすると読み流してしまうのだが、実はビアンションの非常に重要な一面を表している。もちろん、この引用からは患者の苦痛に対して無神経になってしまったベテランの医者たちに対する痛烈な批判が容易にうかがえるだろう。しかし同時にビアンションにおいては、心身両面から人間を観察することが、患者の苦痛に対する本当の理解に直結している⁷⁾のである。こうした側面がビアンションの人物像を考える上で非常に大きな意味を持っているという、その証拠には、『あら皮』においても同じようなことが書かれている。重い病気になったラファエル・ド・ヴァランタンの周りに集まった四人の医者たちの中でも、病人の苦痛に真に同情を示したのはビアンションだけであった。

オラス⁸⁾の顔つきは深い苦悩と悲しみに満ちた憐れみの情を表していた。彼は医者になってまだ間もなかったから、苦痛を前にして無感覚でいることも、死の床にあって無感動でいることもできなかった。(X, p. 259)

これからも見ていくように、ビアンションは医学生、あるいは新人の時だけではなく、医者としての経験を積んでもこのような感受性を失うことなく持ち続けていく。それが彼の名医たるゆえんであろう。またこうした視点は、すぐれた医者への証明であるだけでなく、小説家の資質にもつながるものだと言える。

b) 『村の司祭』

次は『村の司祭』である。『ゴリオ爺さん』からこの作品までの間にも、ビアンションは何度か人の死の間際に立ち合っているのだが、物語の主要人物の診察を行っているという点において、また物語全体のクライマックスに関わっているという点で、『村の司祭』のヴェロニク・グララ

ンの死の間際の場面における彼の役割は一つの典型になっている。しかし実のところ、この小説においてビアンションの出番は非常に少なく、二百ページ以上ある作品の中で、ほんの十ページほどに過ぎない。しかし読者にとってはこの物語のビアンションは非常に鮮やかな印象を残すのである。出番は短くても、ビアンションの登場がこの物語の中で持っている意味は決して小さくはない。

いろいろと問題の多いこの作品を大上段から扱うことはとてもできないので、ビアンションの登場する場面に限って具体的に見ていくことにする。まずビアンションが女主人公のいる村に到着した瞬間を描いた場面である。

そのとき、御者の鞭の音に続いて、一台の軽四輪馬車が坂道を上ってきた。入口の鉄格子の門は開いており、馬車は中庭に入った。そして間もなく、それに乗っている人たちがテラスまでやって来た。それはガブリエル・ド・ラスティニャックを司教に任命するために来た名高い大司教デュテーユ、検事総長のグランヴィル、グロステット氏、そしてルーボー医師はパリで最も有名な医者の一人、オラス・ビアンションに腕を貸していた。(IX, pp. 853-854)

ビアンションは、フランス南西部の小村モンテニャックまで、はるばるパリからやって来ているということに注目しよう。この村にはもともと上の引用にも登場するルーボーという医師がいたのだが、グララン夫人の病状の悪化とともにパリに最良の医者を捜しに行ったのであった。この「パリから来た医者」ということでビアンションに与えられた役割には二つの面があるように思う。一つは当時の科学的知識の限界を明らかにするということである。『村の司祭』という小説においては、文明と宗教⁹⁾ということが大きなテーマになっているのであるが、ヴェロニクの身体に関して、人間の領域である科学の限界を示し、あとは宗教に委ねるという境界線を示す役割をビアンションは担っている。もう一つの面とは、フランスの田舎というそれまで語られたことのなかった未知の部分についての出来事を言語に置き換え、パリに伝達するという役割である。

それでは、ビアンションはグララン夫人を診察するに際して、どういう行動を取っているのか。ここでの彼の行為の中で最も大きなものは、夫人が自らの罪を償うために身につけていた馬の毛の苦行服を脱がせることであった。村の医者ルーボーには決してできなかったことである。彼はビアンションに次のように打ち明けている。

ルーボー医師は言った。「グララン夫人は決してお腹を触らせようとはしませんでした。私はあの方の病気について、表情や、脈の状態や、母親や部屋付侍女から聞いた話からしか知ることはできなかったのです」(IX, p. 857)

そしてピアンションは侍女アリーヌに夫人の服を脱がせるよう言うのだが、その時初めて夫人が苦行服を身につけていることを知るのである。その場面。

「あなたの女主人の服を脱がせなくてはいけない」とピアンションはその時入ってきた部屋付侍女に言った。「それは難しいです。奥様は馬毛の苦行服に身を包んでおられるのです」するとこの偉大な医者はいきなり叫んだ。「何だって！ この十九世紀にまだそのような恐ろしいことが行われているのか」(IX, p. 857)

しかし結局ピアンションはその苦行服を断ち切らせてしまう。

診察は長くはかからなかった。何よりもまず、ピアンションはアリーヌとソーヴィア夫人が病人の意思に関わらず無理にでも馬毛の苦行服を断ち切らせてふつうの肌着を着せることを要求した。二人の医者はこの作業の間サロンに行っていた。やがてアリーヌはこの恐ろしい贖罪の道具をタオルに包んで持ってきて言った。「奥様の体は傷だらけです！」(IX, p. 858)

確かにここでピアンションは直接手を下していないが、グララン夫人が隠し通してきた苦行服を断ち切らせたピアンションの行為は「解剖的」と言うことはできないだろうか。これによって彼は誰も知らなかったグララン夫人の内面を暴いて見せ、そこに無数の「傷」を見出しているのである。この「傷」はもちろんグララン夫人の肌についた肉体的な傷である。しかしそれは同時に心の傷をも表していることに疑いはない。

小説の他のところでは、グララン夫人が抱えている心の苦しみが描かれているのだが、そこでは同じ「傷」 *plaie* という言葉が使われているのである。

ボネ司祭は、ヴェロニクがモンテニャックにやって来たときから彼女が大きな内面の傷を抱えていることに気付いていたが、彼女から完全な信頼を得られるのを待つのが賢明だと判断した。この女性はいずれ彼に罪を告白するに違いなかった。(IX, p. 753)

そして、ビアンションがグララン夫人の診察を終えて帰ろうとするところの描写では、次のように書かれている。

オラス・ビアンションはパリに帰ろうとして、死を目前にしている夫人に別れのあいさつと多額の報酬への礼を言いに来た。彼の足取りはゆったりとしていた。彼は二人の神父の態度から心の傷こそが彼女の身体の傷の原因となっていることを見抜いていたのである。(IX, p. 861)

バルザックの読者ならよく知っているように、グララン夫人の「傷」というのは、過去において自分を恋したジャン＝フランソワ・タシュロンという若者が、そのために犯罪を犯して死刑になってしまった、自らが犯した姦通のために一人の人間を死に追いやってしまったという罪の意識から来ている。

そしてこうした傷は、バルザックによればフランス社会が抱える最大の病に他ならないのである。彼はすでに初期のエッセイである『結婚の生理学』において、フランスの女性が置かれた状況、彼女たちが不幸な結婚生活を送り、姦通に追い込まれるような状況を「巨大な社会の傷」(XI, p. 972)と呼んでいる。『ゴリオ爺さん』の場合と同じく、ここでもやはりビアンションが見つめているのはフランス社会の病だと言えるだろう。

こうしてビアンションは最後の脈を取ると、あとはグララン夫人の身体は医学の手に負えるものではなく、宗教の領域に属するものだとして、モンテニャックの村を去ってパリへと帰っていく。このあとにグララン夫人が友人たちの前で公開懺悔をして自らの罪を告白する最後の場面があるのだが、ビアンションはもはやその場にはいない。彼は自らの役割を終えるとさっと姿を消すのである。このような潔さもビアンションの特徴の一つだ。アランが、ビアンションという後ろ姿をいつも思い浮かべると言っている¹⁰⁾のも、このようなところから来ているのかも知れない。私自身は、ビアンションについては視線の印象が強くて、あまり後ろ姿は想像できないのだが。

c) 『ラブイユーズ』

このあたりのビアンションの活躍としては、『村の司祭』の翌年の『ピエレット』(1840年)で、彼は年上の従兄たちに虐待された薄幸の少女ピエレットを診察するために地方都市のプロヴァンまで赴いている。そして彼女をそこまで追い込んだ残虐行為に対して義憤を発している。この作

品でも彼は最後の数ページでわずかに登場するだけである。

そして1842年に発表され、『ピエレット』『トゥールの司祭』とともに「独身者たち」三部作にまとめられている『ラブイユーズ』でもビアンションが活躍する。この作品での彼の役割も注目すべきものがあるので、簡単に見ておきたい。ここでも彼は終わりの方の十数ページくらいで登場して、そして最後には立ち去っている。この作品での彼の診察の場面は二つある。一つは元軍人で放蕩な生活を送っているフィリップと、偉大な画家への道を歩んでいるジョゼフという二人の息子の母であるアガト・ブリドーの死の直前の場面、もう一つはタイトルにもなっているフロール・ブラジエ、通称ラブイユーズの死病の場面である。

ビアンションは、『幻滅』に見られるように、パリの若い天才たちを集めたセナークルに所属していて、そこにジョゼフ・ブリドーもいた。その友情から、母の容態が危機に陥ったときにジョゼフはビアンションを呼ぶことになった。そのビアンションを描いた一節である。

ビアンションは毎日やってきて真の友人として献身的に病人を看っていたが、最初にやって来た日から、「あの年齢で、これから君のお母さんが置かれるだろう状況も考えると、死が少しでも辛くないものになるようにと、それだけを考えてやらなくてははいけないよ」とジョゼフにはっきりと伝えていた。(IV, p. 753)

この小説では、二人のうち放蕩息子のフィリップを偏愛してしまったアガトの苦悩が延々と描かれている。この一節は援助を求める母親として必死の願いを込めた手紙に対して、フィリップがそっけない返事を寄越したことが彼女の死を決定づけた、それに続く場面である。ここでもビアンションは人の一生の決定的な瞬間の証人として登場している。また『ゴリオ爺さん』や『無神論者のミサ』で見られた彼の友情に篤い一面も見出されるだろう。

しかしこの直後に置かれたラブイユーズことフロール・ブラジエの病氣と死の場面は、これとはまた違った問題を含んでいるように思われる。彼女はジョゼフがビアンションの友人であることを知っていて、義理の弟となった彼のところに助けを求めてきたのだが、すでに「医者も震え上がるような」(p. 534) 病氣にかかっていた。彼女はこの頃結婚していたフィリップから邪魔者扱いされて放逐され、貧しい屋根裏部屋で一人病氣に苦しんでいたのである。次はジョゼフとビアンションが友人のビジューとともに彼女のもとに駆けつけた時の描写であるが、昔は美しかった彼女は、見るも無惨な姿に変わり果てていた。

壁紙もない屋根裏部屋の鋭角になった天井の下に、恐らくは糸くずを詰めたのであろう痩せたマットレスを載せた簡易ベッドが置かれており、三人の若者はそこに一人の女の姿を認めた。その女の顔色は二日前に溺れた死人のような緑色であり、死ぬ二時間前の熱病人のように痩せ衰えていた。このいわば悪臭を放つ死体は、みずぼらしい格子縞のルーアン織の頭巾を髪の毛のすっきり抜け落ちた頭の上に載せていた。(IV, p. 536)

そして彼女を診察したピアンションは、次のように言うのである。

十分後にピアンションが降りてきて、二人の友だちに次のように言った。「僕はデプランのところに行こう。彼ならあの女の人を手術で救えるだろう。きつとうまく彼女の手当をしてくれるに違いない。アルコールの濫用のために彼女はもう滅びたと思われていた世にも珍しい病気を進行させてしまったんだ」(IV, p. 537)

ここでのピアンションは、病人を直そうという気持ちの他に、奇病を発見したという科学的な興奮にとらわれている。そして小説には、このあと「F.B. というイニシャルで表されるある病人」に対して、「近代外科学の最も大胆な試み」すなわち手術がなされたが、患者は結局衰弱で死んでしまった (*ibid.*) と書かれている。

それではここでピアンションが見出したという「滅びたと思われていた世にも珍しい病気」とはいったい何だろうか。バルザックの作品に登場するあらゆる病気について詳細に調べて書いているモイーズ・ル・ヤウアंकは、ここでのフロールの病気は梅毒であり、彼女はフィリップによって娼婦に身を落とした末にこの病気にかかったのであろう¹¹⁾と推測している。しかしここでは、この病気の持っている「意味」について改めて考えてみることにしたい。

フロールがかかった病気の象徴的な意味合いを考えるとすれば、それを解く鍵は、ピアンションらが彼女の屋根裏部屋に向かっているときに、ビジウが漏らした次のような言葉にあると思われる。

フィリップが上昇していくとともに、彼女は堕ちていった。そして伯爵夫人は今や泥の中に沈んでしまったのだ。この野に生まれた少女は今やひどい生活を送っている。僕はどうやってフィリップが彼女を厄介払いしたのは知らないけど。(IV, p. 535)

もともとフロール・ブラジエは、泥にまみれてざりがに釣りをしているところを、イスーダンのルージェ老医師に見出されたのであった。それで「ラブイユーズ」、すなわち「泥さらいの少女」というあだ名が付いたのだが、そのうち彼女はその美しさを武器に頭角を現し、ついにはフィリップと結婚して伯爵夫人になるに至る。しかし彼女が最後にかかったこのひどい病気は、彼女がビジウの言うとおりの最初の「泥」の中に戻ってしまったことを暗示しているのではないだろうか。

この小説におけるフロール・ブラジエは、老医師の息子で放蕩癖のあるジャン＝ジャック・ルージェの妾になったり、元ナポレオン軍の軍人であるフィリップの妻に納まったりと、さまざまな政治システムに翻弄される十九世紀のフランスの姿を象徴しているように見える。大革命の混乱のあとナポレオン時代の栄光を経て、王政復古の束の間の隆盛を経験したこの時代のフランスは、1830年の七月革命によって再び革命の「泥」にまみれることになる。だとすると、ここでもビアンシオンはフロール・ブラジエの病気を通してフランス社会の「病」を見据えていると言えるだろう。これと類似の場面が『従妹ベット』にも見られるので、それを検討しながら、このような仮説をもう少し確かめてみることにする。

d) 『従妹ベット』

バルザックの晩年の作品に至るまで、ビアンシオンは登場し続ける。彼は『娼婦盛衰記』『従兄ボンヌ』のような作品から、最晩年の『現代史の裏側』に至るまで、大小さまざまな病気に立ち向かっているのである。しかしバルザックによって書かれたテキストの中で、ビアンシオンが最後に大きな活躍をするのは、『従妹ベット』においてであろう。また、この作品におけるビアンシオンの行動は、一つ一つがそれまでの彼のさまざまな側面の集大成でもあるように見える。ここではいくつかビアンシオンの登場する場面について、とくにこれまで見てきた他の作品における彼の役割と関連づけて比較しながら検討していくことにしよう。

『従妹ベット』においてもまた、ビアンシオンが活躍する主な場面は、最後の数十ページに集中している。この作品でも、ビアンシオンは何人かの患者を持つことになるが、その人物たちの病気は複雑に絡まり合っているため、少し解きほぐす必要がある。まずユロ男爵夫人のアドリーヌだが、夫の放蕩癖に対する心痛から、神経性の震えが止まらなくなる病気を患うようになる。一時は理性の危機にさえ陥るが、この時ビアンシオンが取った「英雄的な手段」により奇跡的に回復する。次はビアンシオンがアドリーヌの治療に喜びながら、同時にリスベットの気管支の病気を観察する場面である。

翌日、ビアンションは男爵夫人が庭に出ることを許可した。彼はその前に、一月ほど前から軽い気管支の病気のために部屋にいることを余儀なくされているリスベットを検診していたが、博識なこの医者は、決定的な徴候が現れるまではリスベットについての自分の考えはあえて口に出さないことにした。彼は男爵夫人について庭に出て、二ヶ月の室内療養のあとで外の空気が神経性の震えに及ぼす効果を注視していた。この神経病の治癒はビアンションの天才を満足させた。(Ⅶ, p. 427)

一人一人の人間に対して、ビアンションの視線がどのように動いているかが非常によくわかる一節である。彼は二人の患者を並行して診ながら、アドリーヌには回復の兆しを満足そうに眺め、リスベットについてはいずれ彼女の死につながるであろう病気の最初の徴候を観察している。「軽い気管支の病気」とあるが、すでにビアンションがリスベットの病気の深刻さを見抜いているのは明らかであろう。

この場面につづいてアドリーヌとビアンションの会話があり、そこで彼は自身の哲学の一端を披露しているのだが、それも彼の病気や医学に対する考え方を知る上で非常に興味深いので見ておくことにしよう。ビアンションは慈善事業にもたずさわっているユロ男爵夫人と親しく語りながら、自らの職業について次のように言っている。

告解師や、裁判官や、代訴人といった仕事は、もし職業意識が人間の心を飼い慣らしているものでなかったら不可能なものです。この現象を成し遂げずに生きていくことなどできるでしょうか？ 軍人も同様に、戦争の時には私たちが見ているのよりもなおいっそう凄惨な情景を目にしても平常心を保っていられるのではないのでしょうか？ 私ども医者の場合はまだしも治療が成功するという喜びがあるわけですが。(Ⅶ, p. 535. 傍点は原文ではイタリック体)

この文章もよく見れば、最初の方で『ゴリオ爺さん』で見た一節と呼応していることがわかる。ここでのビアンションは、経験を積んだ医者は病気しか見ようとしませんが、自分は病人を見てしまうのだと言った若い頃のビアンションと同じ人物であるのは明らかであろう。彼は今でも人の苦しみをはっきりと見据えているし、それに対する敏感さも忘れてはいない。しかし若い頃の彼のナイーヴな表現に比べると、ずっと大人の視点から人間の苦悩を眺めていると言えるだろう。

そして彼は宗教の欠如と金融の支配という、十九世紀における悪弊を告発して見せる。しかし

そうしたところは、杉山英樹氏の言うとおりに、「そこには何ら目あたらしいものはない。ただバルザックの持論があるばかりである」¹²⁾ということになる。ただ、ここで今論じている観点から見て面白いと思われるのは、彼が最後に「こうしたことは、私のように社会をその内臓において眺めているものなら誰だって漏らしていることなのです」(p. 428)と付け加えていることである。この論文でもすでにいくつかの作品について、ビアンシヨンの「解剖的な視線」を指摘してきたが、彼がその裏に何を見ているかがここで確かめられるだろう。どのような場合でも、ビアンシオンは小説家バルザックの身振り、行いを模倣している。しかもそれを比喩的な形で表現しているということが興味深いのである。

では次に、クルヴェル夫妻のすさまじい病気を描いた場面を見ることにしよう。アドリーヌの病気から、ベットの気管支炎に触れ、さらにクルヴェル夫妻の奇病の描写へと移っていく晩年のバルザックの手腕は見事と言うほかないが、ここでもやはりビアンシヨンの視点に焦点を絞って手短かに眺めてみたいと思う。もと区長のクルヴェルは天性の娼婦であるヴァレリー・マルネフ未亡人と結婚するが、まもなく二人はブラジル人モンテスから移された病気に全身を冒され朽ち果てるように死んでいく。ビアンシオンは最初にこの病気を次のように説明している。

私は今もう減びてしまった病気を観察しています。それは死病であり、われわれもそれに対して為すすべもありません。インドなら治りますが、このように温帯の気候ではどうしようもないのです。中世に猖獗を極めていた病気¹です。医者がこのような病気を相手に繰り広げる闘いは、美しい闘いです。(Ⅶ, p. 428)

この病気とは、ビアンシオン自身の言葉によれば、齒も髪も毛も爪も抜け落ち、手は脹れあがって緑色のできものにおおわれ、手足の先が全て血膿に蝕まれて破壊されるというすさまじいものであった。そしてこの病気の原因についての意見は、そこに集まった科学界を代表する医者たちの間で分かれるのである。

このようなところは『あら皮』のラファエルの診察の場面、医学の権威である三人の医者とビアンシオンが彼を診察する場面を思い起こさせる。ただ『あら皮』においては、若いビアンシオンは三人の医学界の権威による意見を尊重しつつ自分の意見を謙虚に述べていたが、ここではすぐにビアンシオンの意見が採用される。そして反対意見を唱えていた医者たちは、結局この二人の患者に解剖用の死体しか見ていなかったことがわかる。

「これはいずれにせよ立派な死体解剖の対象になるだろうさ」と反対していた医者の方が言った。「それに死体が二つ出るだろうから、その間で比較もできるだろう」(Ⅶ, p. 433)

こうした医者たちは、病気の現象を表面的に眺めて描写することしか考えていない。その裏にある原因には目を向けようとしないのである。それに対してピアンションは、絶え間なく患者のことばかり考え続け、その病気にも心からの興味を抱いている。こうして彼は患者という「人間」をしっかりと見つめて、二人の病気の原因についても正確な診断を下しているのだ。彼は、この病気は「血の汚染」が原因だと主張している。

この病気の原因は急速な血液の変質にあります。血液が恐るべき速さで腐敗していつているのです。私は血液を攻めてみたいと思い、これを分析させました。これから家に戻って友人の有名な化学者であるデュヴァル教授の分析結果を取りに行き、われわれが時に死に対して仕掛けるような必死の手段を試みるつもりです。(Ⅶ, p. 429)

ピアンションはさらに、この血液の汚染は「未知の病原体」(p. 431)によって引き起こされていると言っている。それはどういうものであろうか。ル・ヤウアंकは、ここでのクルヴェルとヴァレリーの病気を「フランベジア (いちご腫)」と称する病気ではないかと推察している。¹³⁾ 確かにここでバルザックは、当時報告されていた奇病の症状をもとにして、この登場人物たちの病気の症状を真に迫る筆致で描写しているらしい。しかしそのことと同時に、やはり小説家がこのような病気にどういう「意味」を込めているのかを考えてみることも必要だろう。

「もう滅びてしまった」が「中世に猖獗を極めていた」というこの病気は、明らかに『ラブイユーズ』における「滅びたと思われていた世にも珍しい病気」と関連づけることができる。それではこの病気をどう解釈するのかということだが、作家のミシェル・ビュートルは、最近出版されたバルザック論の中で、この「血の腐敗に特徴づけられるブラジルの病気」とは、「七月王政下における家族関係の状態を表したもの」ではないかと述べ、この病気そのものが「七月王政の演出でありそれを病床に就かせるもの」だとしている。¹⁴⁾

確かに、この病気はフランス革命が従来王家に代表される血のつながりを破壊してしまったことによる社会の混乱を多かれ少なかれ象徴していると言えそうである。ヴァレリーは最後に改宗するが、クルヴェルは死の間際まで共和派で無神論者であった。彼は「革命の乳を吸っ」て育った人間であることを自認している。クルヴェルとヴァレリーの病気は、程なく終わりを迎え

ることになる七月王政期のフランス社会の病気を象徴するものだろう。だとするならば、ここでもやはりピアンションは、病気を診察することを通して、こうした社会の機能不全をはっきりと見据え、その原因にも目を向けているのだとすることができる。『ラビユーズ』においても、『従妹ベット』においても、こうした病気が一旦滅びた病気として描かれていることについては、はっきりとした解釈を示すことはできないが、恐らくは十九世紀における共和派の台頭とそれによる政治的・社会的混乱を、フランス王家とカトリックが確立する以前の中世における無秩序と異端の横行に喩えているのかも知れない。

最後にピアンションは従妹ベットことリスベットの病状を診て、その死を予告している。従姉であるアドリーヌへの嫉妬や、そのアドリーヌに大事にしていた男を奪われたことに対する恨みから、この老嬢はユロ家に対して復讐心を抱いてきたのであるが、そのベットもついに力尽きる。

リスベットはすでにユロ家の上に輝いている幸福のために非常に不幸を感じているところへ、このさらなる幸運な出来事に耐えることができなかった。彼女の病状はひどく悪化し、ピアンションは彼女が一週間後に死ぬだろうという宣告を下した。彼女は数多くの勝利に飾られたこの長い闘いに、ついに打ち負かされたのであった。しかし彼女は肺結核の恐るべき苦しみの中であって憎しみを心の奥に秘め続けた。(Ⅶ, p. 448)

リスベットを死に追いやった病気が肺結核に違いないが、この引用を見ても、彼女が自らの憎しみのエネルギーに蝕まれ、それが病気の本当の原因になっていることは明らかであろう。この呪われた従妹は心に秘めた憎しみをアドリーヌや他の家族たちにも知られることなく死んでいく。ピアンションにしても、ベットのこうした本心については与り知らぬはずであるが、肺病に冒された彼女の病床に立ち合うことで、すべてを理解しているようにも見える。

おわりに

これまで医師ピアンションが死の直前にある人間を診察する場面を見てきた。それらに共通するのは、彼がいつも死の間際という極限の状況にある人間を、心身の両面からしっかりと見据えているということである。ここまでの分析で明らかにしてきたように、『人間喜劇』の登場人物たちが患う病気は、しばしば十九世紀のフランスを蝕んでいる病を象徴し、あるいはそれを反映している。ピアンションは個人の病気の背景にあるそうした「原因」にも目を向け、それをはっ

きりと意識しているのだが、しかし彼は決して前にいる患者という人間を目から離すことはない。ビアンションの視線が見つめているものは、単なる政治の比喩ではなく、むしろ一人一人の人間の苦悩なのである。彼は病めるフランス社会に生きる人間の苦しみを、その身体的な徴候を一つも見落とすことなく観察しているのだ。

ビアンションの患者の苦しみに対する共感、人間を心身両面から全体的に捉えようとする試みと密接な関係を持っている。前にも述べたように、彼は『ゴリオ爺さん』から『従妹ベット』まで一貫して、目の前の患者に心から関心を持ち、共感を抱いて接している。そしてつねに病氣だけでなく、苦しみを抱えている人間にも目を向けているのである。だから彼は『ラブイューズ』のフロールや、『従妹ベット』のクルヴェルとヴァレリーのような人間の苦しみにも心の底から同情し、真剣に病氣に立ち向かっている。「私は絶え間なく私の患者たちのことを考え続けています」(VII, p. 428) という、彼が最後の二人について語った言葉に嘘はないだろう。そしてビアンションは次のように言う。

「真の医者というものは科学に情熱を燃やすものです。彼はそうした想いと、社会に役立っているという確信によって支えられているものなのです。ご覧なさい、この瞬間も私は一種の科学的な悦びに浸っています。しかし多くの浅はかな人間たちは私を心ない人間と思うことでしょうな」(*ibid.*)

人間の苦しみを全体的に捉えようとする試みは、ビアンションの際立った特徴の一つであり、その「見る」という行為に対する情熱が、病氣を見事だ、美しいとさえ思わせる¹⁵⁾ のだろう。患者の苦痛を深く理解し心から同情を示すことと、新しい病氣の発見に科学的な悦びを見出すこととは、彼の中では少しも矛盾することなく、無理なく調和している。人間の苦しみについて、あらゆる詳細を余さず共感を持って観察する、それは同時に小説家バルザックの営みに他ならないのである。

注

- 1) 「医師ビアンションの目 『人間喜劇』における医学の視点(1)」、『近畿大学語学教育部紀要』第3巻第1号、2003年11月。
- 2) 《Index des personnages fictifs de *La Comédie humaine*》, in *La Comédie humaine*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. XII, 1981. ビア

- ンションについての項目は pp. 1175-1179にある。
- 3) *La Comédie humaine*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. III, 1976. 引用文の翻訳はすべて筆者による。また以下の引用文においても、ローマ数字の巻数とページ番号はこのプレイヤー版『人間喜劇』に依拠するものとする。
 - 4) 「バルザックにおける「症候」の概念と医師ナカール」, 『関西フランス語フランス文学』日本フランス語フランス文学会関西支部, 第4号, 1998年, 「『グランド・ブルテッシュ』あるいは病める身体を語る」(仏文), *Eidolon*, Université de Bordeaux 3, 50, 1997, など。
 - 5) ビアンションは『禁治産』において、ラストニャックとの会話の中で、『ゴリオ爺さん』に描かれた学生時代のことを振り返り、「僕たちは人生の最初にヴォケー館という岩に流れ着いて、世間の波にもまれながら数多くの砂利や汚物を目にしてきた」(III, p. 424)と述べている。
 - 6) 十九世紀の前半においては、例えばカバニスの『心身関係論』(1805)のような本が出版され、知識人の間で広く読まれていた。
 - 7) 人間を心身両面から総合的に捉えるというビアンションの視点と、患者の苦痛に対する共感の関わりについては、以前『あら皮』を分析したときに指摘したことがある(「バルザックと「統合の医学」—『あら皮』の一場面に窺われる医学観」(仏文), 日本フランス語フランス文学会学会誌 *Études de langue et littérature françaises*, n° 74, 1999, p. 39)。
 - 8) 前述の通り、この引用におけるオラス・ビアンションは、当初は別の登場人物であった。1831年の『あら皮』の初版において、この医者には「プロスペル Prosper」という名前を与えられていた。cf. 《Notes et variantes》 pour *La Peau de chagrin*, in *La Comédie humaine*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. X, 1979, p. 1337.
 - 9) 1841年に出版された初版に付された前書きにおいて、バルザックは『村の司祭』がそれよりも前に出版された『田舎医者』と対を成すものだとし、「もし『田舎医者』が近代的な博愛精神の文明への応用だとするならば、この作品(『村の司祭』)はカトリック的悔悛の応用である」と述べている。なおこの前書きは1845年の全集版においては削除された。
 - 10) 「私にはどうしてビアンションというと後ろ姿を思い浮かべるのかわからない。それは彼がいつも立ち去っている、彼がいつも急いでいるということなのであろう。しかし彼の背中には全く安心感を与えるものなのである」(アラン『バルザックとともに』Alain, *Avec Balzac*, 3^e édition, N.R.F.-Gallimard, 1937, p. 108.)。
 - 11) Moïse Le Yaouanc, *Nosographie de l'humanité balzacienne*, Maloine, 1959, pp. 282-285.
 - 12) 杉山英樹『バルザックの世界』, 中央公論社, 1942年, 第十二章「医師ビアンションの像」, p. 343.
 - 13) Le Yaouanc, *op. cit.*, pp. 285-288. ル・ヤウアंकは当時の皮膚病の専門医アリベールなどの記述を引用しながら、確かな論証を行っている。しかし同時にこの研究者はバルザックは医学書の描写に正確に従ったのではなく、作家の自由を行使しそこに幻想的な脚色を施したのであろうと認めている。
 - 14) Michel Butor, *Paris à Vol d'Archange : Improvisations sur Balzac II*, éd. de la Différence, 1998, pp. 274 et 277. (ミシェル・ビュートル『バルザックについての即興II 大天使の見たパリ』)
 - 15) 「それにもしこれがわれわれ医者にとって非常に美しいと思われる病気であっても、他のすべての人にとってはおぞましいものでしかないでしょう」(VII, p. 429)というビアンションの言葉もある。